

水色のやねの小学校

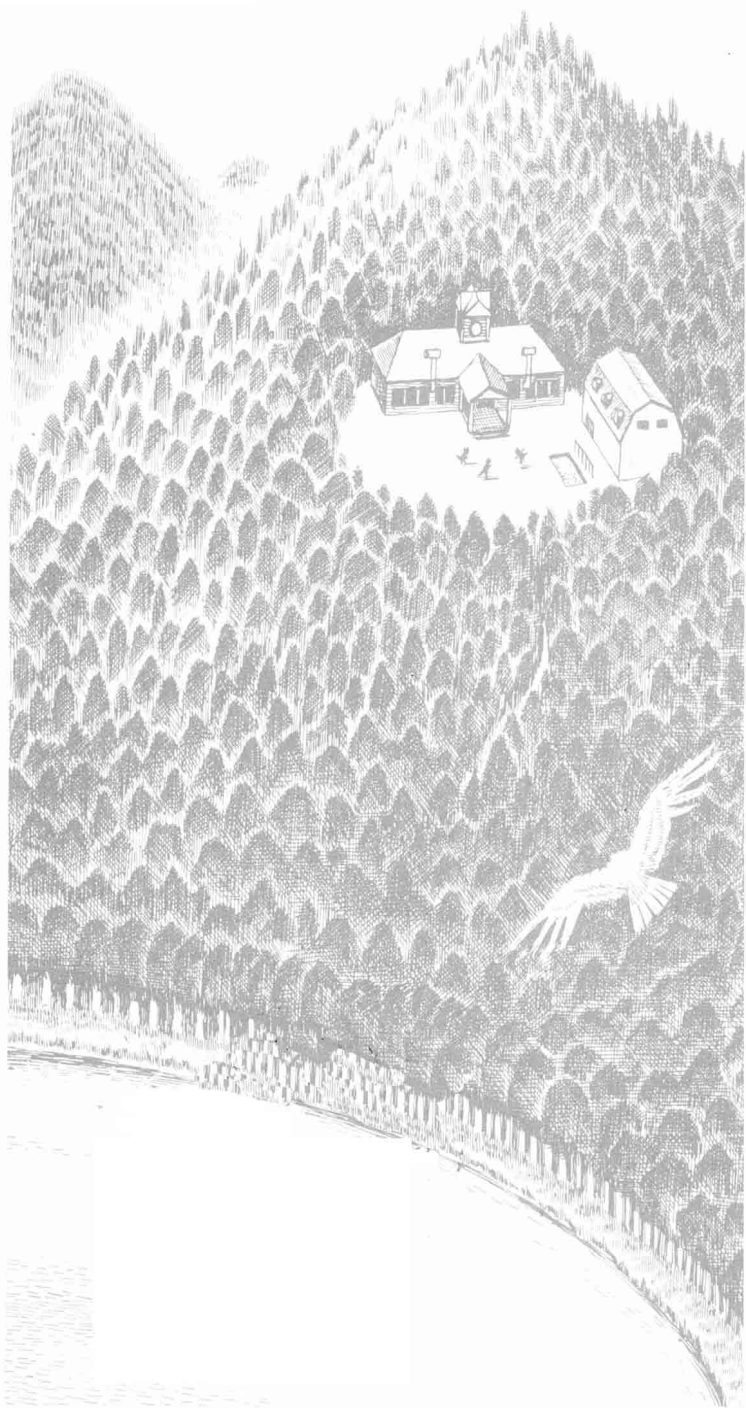
おかもとよしこ

絵 ませなおかた



水色のやねの小学校

おかもとよしこ
絵
ませなおかた



913

おかもとよしこ

水色のやねの小学校

講談社 1981

152 p 22cm

おかもと よしこ

著者——おかもとよしこ

1930年、山形市生まれ。お茶の水女子大卒。中学・高校教師、東大新聞研究所研究生を経て、朝日小学生新聞嘱託を長年勤める。著書に「つうしんぼのない学校」(岩崎書店)、「昭和史(共著/研秀出版)」、「やさしい中国の歴史」「のつぼ先生やめないで」(講談社)などがある。

画家——ませ なおかた(間瀬直方)

1950年、愛知県半田市に生まれる。法政大学文学部哲学科卒。赤坂三好氏に師事。作品に、「ねんどのなみだ」(菁柿堂)。

水色のやねの小学校

昭和56年2月10日 第1刷発行

定価 880円

著者 おかもとよしこ

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京8-3930

印刷所 廣済堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

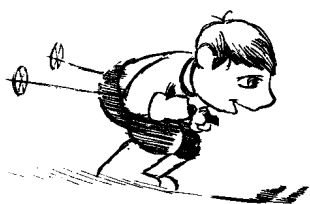
© Yosiko Okamoto 1981 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8093-190271-2253 (0) (児一)

も
く
じ





夜行列車

.....

11

プロローグ

.....

6

水色のやねの小学校

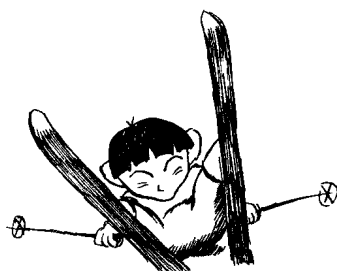
.....

19

かんげいパーティー

.....

33



給食は、ごはんぐり……………51

ゆりちゃんのパようき……………61

校長先生のおやつ……………71

はじめてのふぶき……………79

スキー大会……………94

かなしい物語……………115

わたしたちのうちがなくなる……………133

エピソード……………143

水色のやねの小学校

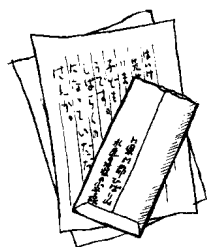


プロローグ

「はいけい。」

先生^{せんせい}がひとり、きゆうにびようきになりました。子どもたちがかわいそうです。しばらくのあいだ、かわりの先生^{せんせい}になっていただけませんか。このてがみをよんだら、すぐ、れっしやにのつて、山^{やま}へきてください。」

こんなてがみが、山^{やま}の学校^{がっこう}から、そくたつで、わたしのいえにとど



きました。

そのころ、わたしは、大学だいがくをそつぎようして、いくらもたっている
せんでした。ほんとうは、小学校しょうがっこうの先生せんせいになりたいとおもっていまし
たが、とてもむずかしいことだと、はんぶんあきらめていました。そ
こで、いえにいて、動物どうぶつがでてくる童話どうわをかいたり、ちかくにすんで
いる子どもたちに、ピアノをおしえたりして、くらしていたのです。

てがみをもらって、わたしはびっくりしました。山やまというのは、北きた
のさむい国くににあるひばり山やまのことです。ひばり山やまの雪ゆきは、かたくてし
こしこしているというのでゆうめいです。ひばり山やまスキー場じきやうには、ス
イスやオーストリアからも、毎年まいとし、たくさんのスキーヤーがやってき
ます。

「でも、どうしてわたしのところに、こんなてがみが……。」

わたしは、「そくたつ」という、赤いスタンプのおしてある、茶色のふうとうをひらひらさせながら、母のところへ、そうだんにいきました。

「いつてらっしゃい。山の子どもが、まりこ（わたしの名まえです。）を、よんでいるのよ。」

「でも、ピアノのおでしさんは？」

「ピアノは、あなたよりも、じょうずにおしえてくれる人がいるわ。でも、山の子どもには、いま、先生がひとつようなのよ。」

「そうかなあ。」

ピアノのことについての母のことは、ちよつとショックでした。そりゃあ、母のように音楽大学をでているわけじゃないけど、わたしがおしえると、なぜか、みんなピアノが大すきになるんです。



「のりちゃんだって、もう、メトードローズおわるのよ。おいしいわ。」
「わたしでよかったら、あなたのいないあいだ、レッスンをひきうけ
ましょ。どうせ、お山の先生やま せんせいもりんじでしょ。びょうきの先生せんせいがか
えっていらしたら、もう、しごとはおしまいよ。」

「そうね、じゃ、おねがいするわ。ね、くれぐれも、ピアノぎらいに
させないで……。」

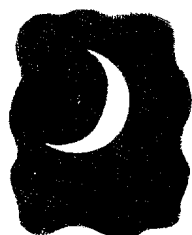
「ばっちり、オーケーよ。」

わたしは、ゆうびん局きょくにいつて、

「デ キルダ ケハヤクイク マチノ」

と、校長先生こうちやうせんせいにでんぼうをうちました。

夜^や行^{こう}列^{れつ}車^{しゃ}



なおおちちゃん・のりこちゃん・しろくくん・たつおくん・けんじくん。この五人^{にん}が、ピアノのおでしさんです。わたしは、空^{そら}色^{いろ}のケント紙^しで、五まいのカードをつくると、おわかれのことばをかきました。それを母^{はは}にわたすと、いそいで、にづくりです。

「ねえ、おかあさん。もう、ずいぶんさむいでしょうね。」

「そうね。ひばり山^{やま}といえは、夏^{なつ}に、ひしよにいくところですね。十月^{がっ}もそろそろおわりだから、コートがいるでしょ。アンゴラの

セーターと、あたたかいスカートもいれないと……。」

わたしはスーツケースに、きるものばかり、はいるだけ、ぎゅうぎゅうづめにつめこみました。それから母^{はは}に、

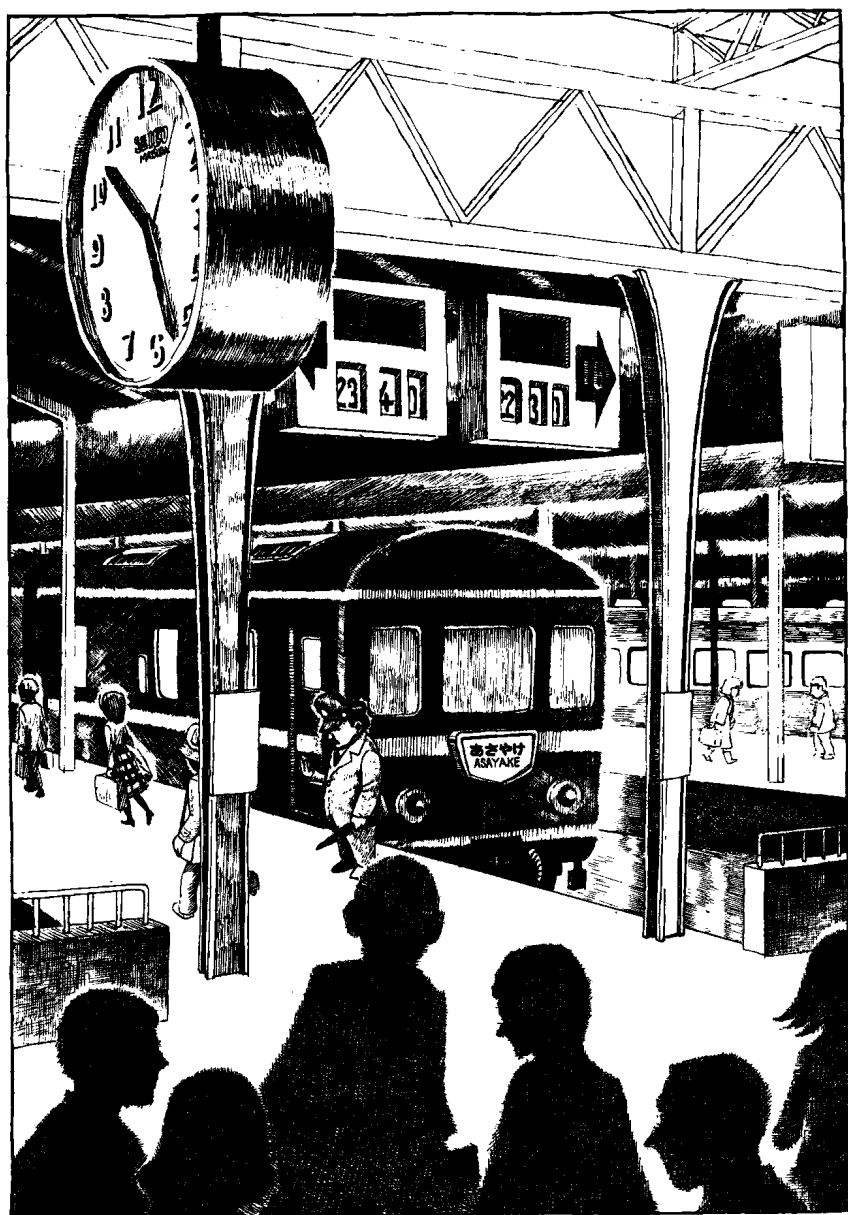
「おしれのなかのスキーザックは、あさひもをかけて、すぐにおくつてよ。くつもアノラックも、みんなはいつているの。スキーはあとでもいいけど。」

とたのみ、さいごに、本^{ほん}だなのすみから、イギリスの子^こどもの本^{ほん}「ふしぎの国^{くに}のアリス」を一さつだけハンドバッグにいれて、いえをでました。

「だいじょうぶ？ きつぷとれるかしら。」

母^{はは}は、さすがにしんぱいそうでしたが、

「水曜^{すいようび}日だし、こんでるわけないわ。それにひとりだけだから、なん



とかなるでしょ。」

ことしはじめて、ブーツをはいた足が、さっそうと、わたしを駅へはこびます。

東京の北のげんかん「U駅」につくと、もう、夜も九時をまわっていました。いそいで、みどりのまどぐちへとびこみます。

「あの、Mまで、しんだい券一まいほしいんですけど……。」
おそろおそろたずねますと、

「満席ですよ。」

「えっ、一まいもないんですか。」

「いまごろきてもむりですね。きょうは、とくにいっぱいです。」

「でも、きょうキャンセルすることもあるでしょう。おねがい、キー